

宮崎さん・映画編第6話「トプカプ」の舞台 イスタンブル

トルコのイスタンブルは、ボスポラス海峡（最も狭い所では700m弱）を隔てて、アジアとヨーロッパの両大陸にまたがる大都会である。その歴史はギリシャのビザンチウムに始まり、1000年続いた東ローマ帝国時代はコンスタンチノーブル、そして1453年にオスマントルコが東ローマ帝国に勝利しイスタンブルと名前を改めた。イスタンブルは東ローマ帝国以来1600年間も首都であり続けたが、第1次世界大戦後、首都はイスタンブルからアンカラに移った。



イスタンブルのガラタ橋から旧市街



旧市街ブルーモスク

オスマントルコ（1299年～1922年）は、623年間にわたり絶大な権力を持つスルタンが支配して来た。スルタンはイスタンブルの高台にそびえるトプカプ宮殿に居住していた。

注) トプカプとは（トプ=大砲、カプ=門。英語ではトプカピ）

トプカプ宮殿は風光明媚な金角湾を眼下に収める高台にあり、1853年まで使用していたが現在は博物館となって一般に開放されている。



トプカピ宮殿への入口

トプカプ宮殿の見学は、5千人の食事を賄った巨大な炊事場、スルタンのハーレム、贅を尽くした秘宝が数多く展示してある宝物館、陶磁器の展示室には中国や日本の有田焼などが陳列され、いずれも見ごたえのある品々であり見る人にオスマントルコの絶大な力をこれでもかと知らしめ大きなため息をつかせる。

トプカプ宮殿のハーレムは、日本の大奥のシステムに酷似しているように感じた。

ハーレムを見ながら、世界の美女が侍る様はさぞかし壮観であったろうと、つい感じ入って“フーム、羨ましい”とつぶやきを漏らした、途端にまわりの女性陣の鋭い視線を感じ、夢見心地からにわかになれに返り恥じ入った。

宝物館はオスマントルコに集まった金銀玉石の数々が、照明を落とした室内にびっしり展示されきらきらときらめき見る人の度肝を抜く。宝石類の展示はスルタンの権力の絶大さを象徴するようで凄みすら感じた。

また宝石と金でこれでもかと飾り立てたきらびやかなスルタン着用の鎧や、赤ん坊をあやす揺り籠はまばゆく純金製の手の込んだものだ。あやしく煌めくダイヤの中にはよく知られた（スプー

ン売りのダイヤモンド)もあった。さらに美しくまばゆいルビーやパールなど、宝石独特の妖しい光を発している。

あまたあるこれらの宝石の中でも、特に目を引いたのはエメラルドの桁違いの分量の多さであった。大きな金の皿に大盛りにしたエメラルドの輝きには吸い込まれるような魔力のような気配を感じ、これまで指輪のささやかな大きさしか見たことのない身にとっては、ただただ驚嘆するばかりである。



大皿にエメラルドがびっしり



エメラルドの装飾品



金のゆりかご

エメラルドの数々が展示してある一角に、映画に登場する“主役”の「宝剣」がうす明かりの中に吊るされ浮かび上がっていた。短剣の柄の部分には大きな燦然と輝くエメラルドが三個、鞘の部分は純金製でダイヤやエメラルドがびっしり埋め込んである。これは凄い石川五右衛門ならずとも、ついふらふらとしてしまうような誘惑を感じる見事な宝剣である。

「トプカピ」は、1964年アメリカ制作のサスペンス映画で、女泥棒が恋人役の泥棒と相談して、警戒厳重な宮殿内にあるスルタンの宝物殿から、エメラルドで宝飾された短剣を盗み出すといったストーリーである。映画に登場する主演女優はギリシャのメリナ・メルクーリで“日曜はだめよ”の主演女優でもある。彼女は先年他界したが、ギリシャの文部大臣を務めた。



余談だが江利チエミが歌った「ウシュクダラはるばるたずねてみたら・・・」のウシュクダラは、ヨーロッパ大陸側からボスボラス海峡をフェリーで約30分のアジア側にあり、イスタンブールのベッタウンの趣のあるところである。また庄野真代の「飛んでイスタンブール・・・」も大ヒットし、トルコとかイスタンブールの地名が歌によって日本人にも広く知れわたったのである。

トルコは歴史の宝庫であり、また奇岩が覆うカッパドキアや真っ白な雪山と見まごうパムカッレなど珍しい景観がある。美食家のスルタンのおかげでトルコ料理は美味この上なく日本人の舌にもよく合う。そしてスルタンも好んだであろうベリーダンスは観光客を夢の
トプカプの秘宝 世界へ誘う。 (1997年)



⇨ウシュクダラのフェリー乗り場

